説教20220417ヨハネ20：1-18「復活のイエス」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

私たちが復活のイエス様から呼ばれて、又私たちの体もよみがえって、イエス様と相まみえる時に、私たちは深い喜びに満たされることでしょう。その喜びのおおもとにあるのは、愛であると思います。そういってもあまりにも漠然としていますが、Ⅰコリント書13章を読めば、愛の大いなることが知らされます。「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」とパウロは言います。私たちは最後にはイエス様に相まみえることを信じ、その希望を胸に抱いて日々を送っていますが、その日々に於いて、イエス様と愛し合い、愛の絆で結ばれていることが何よりも大切だとパウロは言うのです。確かに、愛し合っていた方との再会のほうが、再会に伴う喜びはひとしおでしょうし、その愛が深ければ深いほど、信仰も、希望も増し加えられるという事でしょう。

ただ、愛すると言うことは試練や忍耐や試みやとまどいを必然的に伴うことで、だからこそ愛が深まっていく喜びがあるのです。パウロは言います。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」こんな風にパウロは言いますが、これは裏を返せば、私たちが愛することに於いて、忍耐が無く、情けなく妬み高ぶり、無礼になってしまうなどなどの現実を眺めての勧告という事になるでしょう。

今日の聖書箇所では復活の主イエスとの再会の喜びを語るに相応しい二人の人が出て来ます。それはマグダラのマリアと、イエスが愛されていた弟子の二人です。イエスが愛されていた弟子は２０章２節に出て来ますが、聖書中、この人の固有名詞は出て来ず、恐らくヨハネのことなのではないのかと推定されている人物です。今日はこの弟子のことを愛弟子とお呼びしたいと思います。さて、このマリアと、愛弟子とは性格も立場も全然違うのですが、この二人がイエス様と深く愛し合っていたという点では同じです。但し、その愛の形も全然違うのです。マリアは罪深い女でありましたが、イエス様によって７つ悪霊を追い出していただき、十字架のイエスを最後まで見守り、墓に葬られるまで見届けた人物です。そして愛弟子は最初からイエスに従った少年で、最後の晩餐の席でイエスの胸に寄りかかった人物です。ちなみにこの愛弟子の愛は、神の愛を意味するアガペーではなく人の間の友愛を意味するフィレオというギリシャ語の語句が使われています。この二人のイエス様との愛を一言で表現すれば、マリアのほうは激しく燃える愛、愛弟子のほうは静かに持続する愛とでもいえましょうか、今日はそれぞれの愛し方を味わいながら、私たちは復活のイエス様との再会を喜んで参りたいと思います。

愛弟子がよみがえりのイエス様に会ったのは、墓の中ででした。8節に「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。」と記されています。「見て、信じた。」とありますが、これはイエス様の体を見て、イエス様が復活されたことを信じたというのではなく、逆に、イエス様の体がアマ布からきれいに抜け出て、どこかに行ってしまって見えなくなっていたからイエス様が復活されたという事を信じたのです。空になったアマ布の状態を見て、愛弟子はイエス様が生きていて、どこかに居られることを直感し、信じたのでした。愛弟子は、イエス様を愛することに於いて、相手のことを深く知り、相手との理解を深め共感を増し加えるタイプの人物ではなかったでしょうか。この様に、愛することは相手を知る、という事でもあるでしょう。イエス様のことを深く知って愛していた愛弟子は、たとえこの時イエス様の体が見えなくても、イエス様が生きておられることを知り、その喜びに満たされることが出来たのでした。

一方マグダラのマリアは、イエス様が死んでしまってから嘆き悲しんでいます。彼女は、安息日が開けた、週の初めの日をまちわびて、まだ暗いうちからお墓に行ってイエス様のなきがらに会おうとしたのでした。この時マリアは愛弟子の様に冷静ではいられず、イエス様が死んだことに動揺し、悲しみのあまり取り乱し、判断力を失っていたようです。墓の入り口の石が取り除けてあることから、彼女は想像して「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」とペトロと愛弟子とに告げるのです。この時彼女はこのことを告げに二人の処に走っていった、と記されています。彼女はこの二人が何かを解決してくれると思ったのでしょうか、或いは感情に任せて慰めを得るために二人の処に走っていったのでしょうか。一つ確かなのは、彼女の中に、主を墓から取り去ったのはあの恐るべきユダヤ人たちか或いは盗賊たちの仕業ではないかと言う恐れの感情が渦巻いていたという事です。ともかく彼女はこの様に感情に突き動かされ、衝動的に行動するのですが、それから又墓の前に舞い戻って、墓の外に立って泣いていたのでした。

感情的に取り乱し、衝動的に行動する彼女に必要なのは、イエス様の慰めでした。過去に７回もイエス様が悪霊を追い出して下さった彼女にとって、こんな絶望的な時に、イエス様にすがりつき、イエス様から慰められ癒されるという事は、もはや習い性となってやめられないことだったのでしょう。ここに私たちはイエス様と私が愛し合う形の一つの典型を見ることでしょう。自分の悲しみや淋しさでいっぱいいっぱいになっているマリアは、いわば今迄イエス様にすがりついて生きてきたのであります。そのようなマリアをイエス様は許して下さり、彼女に宿っていた悪霊をその都度、追い出し、彼女を立ち直らせてきたのでした。それがイエス様が彼女を愛した証しでありましょう。

マリアは今度は天使たちに向かって「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」と言うのです。そして後ろを振り向くと一人の男が立っているのを彼女は見るのです。それはイエス様そのお方でした。しかし彼女はそのことに気が付きません。なぜでしょうか。それは彼女の心の在り方によります。彼女の心はイエスを失った悲しみと淋しさでいっぱいになっていました。そこにイエス様を探し求めるだけの心の余地は残っていませんでした。又、敢えて言えばこの時彼女が探し求めていたのは、イエス様のなきがらだったのではないのでしょうか。この様に、彼女はこのどうしようもない状況に置かれて、彼女自身の感情や思いや考え方に突き動かされ、イエス様がよみがえられて、ここに居られるなどと言うことは想像だにできなかったに違いありません。このままですと、彼女が絶望のふちに沈んでいくのは想像に難くありません。

ところが、彼女を愛してやまないイエス様が、彼女をそのまま放っておくことはありえないことでした。イエス様はこの時、彼女を愛されて、自分のほうに引き寄せて下さったのです。それがイエス様の彼女に対する「マリア」という声掛けに現れています。「マリア」とイエス様から声を掛けられるだけで、マリアは今迄自分を支配していた感情や思いや考え方を抜け出て、再びイエス様のほうに引き寄せられたのでした。そんな彼女に対しイエス様は「わたしにすがりつくのはよしなさい。」と言われます。この御言葉は古来様々に解釈をされていますが、この説教の流れから言いますと、彼女は「マリア」とイエス様から声を掛けられた時点で、再びイエス様と愛しあう関係を取り戻したので、もはや、すがりつくまでもない、という風にも言えるでしょう。そうしてマリアはイエス様に促されて弟子たちの処へ行って「私は主を見ました」と告げるのです。少し前にマリアは「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」と人々に触れ回っていました。それは、私の悲しみ、私の嘆きを人々に聞いてほしい、分かってほしいという、自分の慰めを求めるための触れ回りだったでしょう。それに較べますと、よみがえりのイエス様に出会い、再びイエス様と愛し合う関係を取り戻したあとの、彼女の「私は主を見ました」と告げ知らせとでは、おおきな違いがあります。

翻って私たち自身のことを思いますと、私たちも、ややもすると自分の抱える悲しみや嘆きを触れ回ったり、人の悪いところを触れ回ったりしがちなのです。それは私たちの内にある罪がなさしめる技でありましょうが、この復活のときと言うのは、私たちが全く向きを変えて、その罪をイエス様から赦していただいて、再びイエス様と愛し合う関係を取り戻し、喜びに満ちてそのことをお祝いする時であります。

イエス様と私とが愛し合う形と言うのは、愛弟子の様に、知的に、イエス様のことを深く知っていくという事も大事です。愛弟子は、たとえイエス様の体を見なくても、イエス様がどこかで今、生きておられるのだという事を信じることが出来ました。それは彼が日ごろから、イエス様と親しくやり取りをして、イエス様の事を少しでもよく知ろうとしていたからに他なりません。一方で、マリアのほうは、愛弟子の様にイエス様を愛することは出来なかったかも知れませんが、どんな時にでも、イエス様にすがりつき、助けを求めるという仕方でイエス様への愛を貫いたのであります。イエス様に促されて今、「わたしは主を見ました」と告げ知らせる彼女は、本当に喜びに満ちて告げ知らせ、救いの喜びの道の一歩一歩をイエス様と共に歩まされているのです。

イエス様は、かつて、私たちと同じ体を伴って、この地上に降ってきてくださり、私たちと愛し合う者となって下さいました。そして墓から出て来られ、なきがらで終わらない生きた体を私たちに示されました。私たちはこの地上を歩む間、イエス様と愛し合うことによって、やがて生きた体のイエス様に再会するに相応しい心と体に、日々変えられていきたいと願います。

お祈り

父なる神

あなたは、御子イエスをよみがえらせ、罪と死の支配を打ち砕き、全ての者が御子によって新しい命を生きるようにつくりかえられました。その計り知れない御恵みに感謝し、あなたに讃美を捧げます。

御子は、この地上に来て下さり、私たちの一人一人を愛し、この上なく愛し抜かれました。その大いなる技を覚え、私たちも憎しみ高ぶりねたむことを止め、互いに愛し合うことが出来るように私たちをつくりかえて下さい。

私たちの罪を打ち砕かれた御子イエスの痛み苦しみを覚えます。どうか私たちが、あなたの前に、憎み合い争っていることの悲しみを悟り、愛することの喜びに向き直ることが出来るようにしてください。

復活された御子の体と聖霊が教会に満ち溢れ、私たちが聖霊の親しき交わりのうちに、全てのときを過ごしていくことが出来ますように

父と聖霊と共に一体であり世よ生き支配されています